

学院長 嶋田 順 好

中高のグローバル・スタディーズの一環として1月12日に同窓生で日本を代表する通訳者の長井鞠子さんをお招きし、「伝える極意」というテーマで講演をしていただきました。「伝える極意」を極めた方だけあって、1時間ほどの講演でしたが、中高生一同が、集中して楽しく興味深く聴き入ることができる素晴らしい講演でした。

真っ先に中高6年間の聖書の授業で旧約聖書、新約聖書を学び、英語文化圏の土台を築いているキリスト教的教養をしっかりと身に着けることができたことが、通訳者としての働きをする上で大変役に立ったということをお話しておられたことが印象的でした。

英語の授業では、中学1年に入学してから3か月間は教科書も開かないで手鏡を持ってひたすら発音の練習をさせられ、発音記号だけで英文を読む訓練も受けたそうです。確かに今でも長井さんと同年代の同窓生の皆さんは、とても美しい発音をなさる方が多いことに驚かされます。長井さんが宮城学院で学ばれた1960年代は、常に10名前後の宣教師の先生方が在籍していた時代ですから、ネイティブの先生方による英語の授業が、どこの学校よりも充実していたことは間違いありません。

更に、幼稚園児が学ぶようなとても簡単な英詩だったそうですが、授業では必ず覚えて、クラス全員で声を合わせて唱えたそうです。日本語は五七調の音節が揃っていると快く聞ける言語ですが、英語はリズムカルな言語なので、なによりもイントネーションを身に着けることが重要となり、英詩を覚えて皆で斉唱することにより、英語本来のリズム感を体得することができたそうです。その関連で英語の教科書を暗記するだけではなく、暗唱すること、つまり事実声帯を振るわせて繰り返し、繰り返し発音し覚えることの重要性を説いておられたことも印象に残りました。

前任校時代に私は青山学院の最初の日本人院長となった本多庸一の生い立ちを調べたことがあります。彼は弘前藩主津軽承昭の寵愛を一身に受けた藩内随一の俊秀でした。幼年の頃から朱子学的素養を身に着けるべく、6歳で父から『孝経』を学び、8歳にして藩校の典句職から漢籍の素読を学び始めます。彼は11歳までに『四書』と『礼記』を終え、『易経』に進んだところで藩校稽古館に入学します。13歳になった時ようやく素読級を終え、特選で会読席に進級したそうです。実に本多は7年間もひたすら素読で漢籍を学び続けたこととなります。気の遠くなるような退屈な学びだったのではないかと思う反面、このような学びを基本にして漢文（古文中国語）の読み書きを、日本の知識階級が、完璧に身に着けていったことは心に留められるべきことではないかと思ふのです。

言語学的事実は何もよく分かりませんが、表音文字の英語と表意文字の漢文ということでは対照的な言語ですが、それぞれの語学習得の最初では暗唱と素読が重んじられていたことに興味をそそられます。

前にもこの欄で取り上げた聖句ですが、詩編1編2節には「主の教え愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」への幸いが告げられています。「口ずさむ」と訳された動詞は、元々ライオンが獲物を仕留めて満足そうに喉を鳴らす様や、鳩がククー、ククーと首を振りながら餌を啄む姿を意味する言葉だったそうです。人間の最も基本的な生理的欲求の一つである食欲になぞらえて、ひたすら聖句を唱え、愛唱し続けることの幸いが告げられています。そのようにして聖書の民のアイデンティティも築かれていったのでしょう。

録音や複写が容易になったこの時代に、いつのまにか暗唱し、素読する伝統が、学びのなかで片隅に追いやられてしまっているように思えてなりません。今一度、暗唱すること、素読することの大切さを英語学習のみならず、様々な教育の現場で生かすことが求められているのではないのでしょうか。そんなことを考えさせられた長井鞠子さんの講演でした。